教職課程科目「教育課程論」における教育方法の工夫：
課題「新しい教科・活動を含む時間割の作成とその説明」を題材に

東岡　達也（愛知大学　非常勤教員）

1．はじめに

本稿の目的は、筆者がこれまでに担当した教職課程科目「教育課程論」で実施してきた教育方法の工夫を、反省を踏まえつつ整理することである。この作業を通して、教職課程における教育実践の報告を行うこととしたい。

筆者は非常勤講師として、国・私立四年制大学や私立短期大学において「教育課程論」、「カリキュラム論」、「学校カリキュラム論」といった科目を担当してきた。これらの科目は、教育職員免許法施行規則で定められる「教育課程の意義及び編成の方法（カリキュラム・マネジメントを含む。）」に対応する科目（以下、「教育課程論」）である。表１の教職課程コアカリキュラムが示すように、「教育課程論」では、全体目標を踏まえて（１）教育課程の意義、（２）教育課程の編成の方法、（３）カリキュラム・マネジメントの三つの視点から、それぞれ３つの一般目標と８つの到達目標が、学生が修得すべき資質能力として掲げられている[(1)]。本稿が対象とする教育実践は、主に「（２）教育課程の編成の方法」と関わる。つまり、本稿では、「教育課程編成の基本原理及び学校の教育実践に即した教育編成の方法を理解する」という一般目標を学生が達成するために、筆者がこれまでに行ってきた教育方法の工夫を振り返り、整理する。

なぜ「（２）教育課程の編成の方法」に着目するかと言えば、学習指導要領の理解と必ずしも直接関わりのない内容をいかに学生がよりよく学べるか、という困難に筆者が直面したためである。「教育課程論」では、学生が修得すべき資質能力として、学習指導要領の理解が重要な位置を占めている。たとえば、「（１）教育課程の意義」では、３つの到達目標のうち２つが学習指導要領に関わる内容であり、「（３）カリキュラム・マネジメント」においても、２つの到達目標のうちの１つが「学習指導要領に規定するカリキュラム・マネジメントの意義や重要性を理解している」こととされている。こうした学習指導要領の理解を促すために、筆者が授業で指定する参考書[(2)]を含む多くの教育課程論の教科書では、学習指導要領の定義、変遷、現行の学習指導要領の特徴などが取り上げられており、学習指導要領について体系的に学ぶ機会が充実している。加えて、学生は授業において実際に学習指導要領を読むことで、学習指導要領とはどのようなものかを具体的に理解することができる。

他方、学習指導要領の理解と直接には関わらない「（２）教育課程の編成の方法」を授業で扱う際に、筆者は以下の３点の困難を感じた。つまり、（１）到達目標の一つ目に「教育課程編成の基本原理を理解している。」（下線筆者）とあるように、抽象的な用語や概念を取り上げる機会が多く、学生の理解を促すには工夫が必要であること、（２）到達目標

表１　教職課程コアカリキュラムにおける
「教育課程の意義及び編成の方法（カリキュラム・マネジメントを含む。）」

全体目標：学習指導要領を基準として各学校において編成される教育課程について、その意義や編成の方法を理解するとともに、各学校の実情に合わせてカリキュラム・マネジメントを行うことの意義を理解する。

(1) 教育課程の意義
一般目標：学校教育において教育課程が有する役割・機能・意義を理解する。
到達目標：
1）学習指導要領・幼稚園教育要領の性格及び位置付け並びに教育課程編成の目的を理解している
2）学習指導要領・幼稚園教育要領の改訂の変遷及び主な改訂内容並びにその社会的背景を理解している。
3）教育課程が社会において果たしている役割や機能を理解している。

(2) 教育課程の編成の方法
一般目標：教育課程編成の基本原理及び学校の教育実践に即した教育編成の方法を理解する。
到達目標：
1）教育課程編成の基本原理を理解している。
2）教科・領域を横断して教育内容を選択・配列する方法を例示することができる。
3）単元・学期・学年をまたいだ長期的な視野から、また幼児、児童及び生徒や学校・地域の実態を踏まえて教育課程や指導計画を検討することの重要性を理解している。

(3) カリキュラム・マネジメント
一般目標：教科・領域・学年をまたいでカリキュラムを把握し、学校教育課程全体をマネジメントすることの意義を理解する。
到達目標：
1）学習指導要領に規定するカリキュラム・マネジメントの意義や重要性を理解している。
2）カリキュラム評価の基礎的な考え方を理解している。

の二つ目が「教科・領域を横断して教育内容を選択・配列する方法を例示することができる。」（下線筆者）であるため、用語や概念の理解だけでなく学生が自ら教育課程編成を実施することができるようになるための工夫が必要であること、（３）到達目標の三つ目に「単元・学期・学年をまたいだ長期的な視野から、また幼児、児童及び生徒や学校・地域の実態を踏まえて教育課程や指導計画を検討することの重要性を理解している。」（下線筆者）とあり、教育経験の少ない学生たちが、長期的視野や子ども・学校の実態を踏まえた考え方を身につけるためには工夫が必要であること、の３点である。

以上の困難に対して、筆者は、次の点に注意して教育方法の工夫を試みた。（１）抽象的な内容に対しては、可能な限り多くの具体例を示すこと、（２）なるべく多くの授業回で、学生自らが教育課程編成を実施する経験をすること、（３）学生の被教育経験で得られた視点を教育課程編成に取り入れること、（４）以上の３点と、学習指導要領やカリキュラム・マネジメントといった本科目の他の到達目標の内容とを関連づけること。具体的には、以下で整理する。

２．実践の概要

前節の４点の工夫を実現するために、授業では、次の最終レポート課題を設定した。

> この授業で学んだ内容を踏まえ、現在の学校教育に必要だと思う新しい教科または活動を１つ以上提案し、その教科・活動を組み込んだ小・中・高いずれか一学年の時間割を作成してください。その上で、その新しい教科・活動および時間割の説明をしてください。

この問いを初回の授業で提示することで、学生が到達目標を具体的に描くことができると考えた。また、上述の課題を提示することに加え、「新しい教科・活動の内容や、時間割の構成自体に正解はないため、できるだけ自由な考えを持って課題に臨むこと」、「ただし、授業各回で『教育課程論』として身につけるべき知識を学ぶため、各授業回で学んだ内容を最終課題に反映させること」を伝えた。初回の授業では、前節の工夫点「（２）なるべく多くの授業回で、学生自らが教育課程編成を実施する経験をすること」や、「（３）学生の被教育経験で得られた視点を教育課程編成に取り入れること」を学生が意識するような声がけを行っている。なお、最終レポート課題は形式を指定せず、後述の評価項目によって評価することを学生に伝えるが、見本として図１のような Word ファイルを LMS 等で共有し、必要に応じてダウンロードして利用してもよいという指示を与えている。

授業全体（２単位を想定）の構成は次のとおりである。まず序盤から中盤で、教育課程編成の基本原理を学ぶことと、学生が自らの経験に基づいた新しい教科・活動の編成を行うことで、基本原理と学生自身の考えとを結びつけながら教育課程編成の感覚を徐々に掴んでゆくことを目標とする。中盤では、学習指導要領の変遷とカリキュラム・マネジメン

学籍番号：＿＿＿＿＿＿　氏名：＿＿＿＿＿＿

年生						
	月	火	水	木	金	土
1						
2						
3						
4						
5						
6						

新しい教科・活動名：

時間割の説明：

図１　最終レポートのフォーマット例

トの考え方を、具体的な実践事例（経験主義と系統主義の代表的な実践事例や、文部科学省が提示する現行の学習指導要領に関わる事例集）を通じて理解する。中盤から終盤にかけては、現行の学習指導要領の特徴を踏まえて、新しい教科・活動を活用した教育課程編成を行い、最終レポートの完成を目指す段階とする。

以上の授業全体の構成の中で、学生が教育課程編成を実施する取り組みは、以下の７項目に分けられる。これらは、最終レポートの評価項目にも対応する。

１）新しい教科・活動の名前、その教科・活動を含む特定の学年の時間割の作成

２）新しい教科・活動が必要な理由と、その教科・活動の「教育内容の構成」原理に基づいた説明

３）新しい教科・活動を、なぜその学年や学校段階に行うことが適切かの説明

４）カリキュラムの編成原理に基づいた時間割の説明

① 時間割で工夫した箇所の説明

② カリキュラムの編成原理を用いた、新しい教科・活動と他の教科・活動との関連の説明

５）新しい教科・活動を導入する際に利用す

る制度と、その制度が適している理由

6）新しい教科・活動の到達目標

7）教育内容や教育方法・評価方法の具体例の概要

次節では、これらの７項目を具体的に授業でどのように展開してきたかを整理する。

3．実践の詳細

1）新しい教科・活動の名前、その教科・活動を含む特定の学年の時間割の作成

この回では、学生に図１と同様のワークシートを配布し、新しい教科・活動とそれを組み込んだ時間割をなるべく自由に提案するように促す。「教科」と「活動」に分けた理由は、教育課程には、「教科」と「教科外」があることを学生が理解するためである。ただし、この回のワークの目的は、自由にアイデアを出すことに主眼を置いており、制度を学ぶことではないため、具体的な違いについては詳しく説明せず、学習指導要領の基礎を学ぶ回に説明することとしている。なお、「自由なアイデア出し」と言っても、道徳的に問題がある内容や、既存の教科と類似しており新規性が感じられない内容などは書かないよう指示する。また、時間割の作成時によく見られるのが、小学校の時間割に「数学」を記入したり、高等学校の時間割に「社会」を記入したりする場合である。時間割に既存の教科を記入する場合には、適切な理由がない限り、学校教育法施行規則や、学習指導要領内の同規則を参照して、学校段階に合わせた教科にするよう指示をする。最後に、クラスを１グループ３、４人のグループに分け、お互いのアイデアを共有する。この回に限らず、グループワークを積極的に取り入れることによって、受講生同士が、アイデアを膨らませ、深め合う機会となることを意図している。

2）新しい教科・活動が必要な理由と、その教科・活動の「教育内容の構成」原理に基づいた説明

この回では、学生が提案した自らの新しい教科･活動の理解を深めることを目的とする。その教科・活動が必要な理由を考えることにより､現状の学校教育に対する自らの認識と、教育の目的や目標をどのように考えているのかを、新しい教科・活動の説明を通じて相対化する。さらに、この回では、「教育内容の構成」の視点から、自らの教科・活動を説明する。安彦忠彦によれば､「教育内容の構成」[(3)]は、教育目的や教育目標に依存するものである[(4)]。

学生が自らの教科・活動を説明する際に参照とする教育内容の構成は、「学問の重視」、「社会の要求の重視」「子どもの重視」の３点に分類している。これは、安彦（2006, 2019）の「学問的要請」「社会的要請」「心理的要請」に対応し、また田中編（2018）の「科学を重視するカリキュラム」「社会の要求を重視するカリキュラム」、「生活経験を重視するカリキュラム」に対応している。自分が考えた新しい教科・活動は、学問や科学の体系性を重視しているのか、政治的・経済的社会への適応を重視しているのか、子どもにとっての身近な生活や興味・関心、発達などを重視しているのかを、「学問／社会／子ども」の視点

から説明することを課題としている。ただし、学生が考えた新しい教科・活動が、この中のどれかだけに当てはまることはほとんどなく、２つ、あるいは３つの要素を含む場合がある。そのため、学問／社会／子どもを合計で10とした時に、それぞれの割合と、その割合になる理由を記述するように指示している（例：新しい教科「マナー」は学問：社会：子ども＝１：７：２）。

３）新しい教科・活動を、なぜその学年や学校段階に行うことが適切かの説明

２）の課題で「子どもの重視」の視点を説明する際に、「学習指導要領においては、児童・生徒の心身の発達段階を考慮した教育課程編成が求められている」ことに触れているため、新しい教科・活動をなぜその学年や学校段階に行うことが適切かを説明する項目を設けている。本授業では、他の学年や学校段階ではなく、その学年や学校段階にした理由と、他の学年や学校段階との関連性をワークシートに書き込む活動を行う。この活動を通じて、学生が「学年をまたいだ長期的な視野」から、教育課程を編成することができるようになることを意図している。

４）カリキュラムの編成原理に基づいた時間割の説明

この授業では、① 時間割で工夫した箇所の説明と、② カリキュラムの編成原理を用いた、新しい教科・活動と他の教科・活動との関連の説明、の二点を説明する回としている。①の「時間割で工夫した箇所の説明」は、「なぜその時間にその教科にしたのか」、「土曜日も含め、なぜその曜日はその時間数にしたのか」「これまで自分が受けてきた学校教育とはどこが、なぜ違うのか」などを記述することを求めている。これは、学生に理想的な時間割を自由に書かせたあとで、実際の学校は、なぜそうなっていないのかを、小・中学校の標準授業時数や、高等学校の標準単位数によって説明するための前段階の活動にあたる。

次に②の「カリキュラムの編成原理を用いた、新しい教科・活動と他の教科・活動との関連の説明」は、いわゆるカリキュラムの編成原理である「教科カリキュラム、相関（関連）カリキュラム、融合カリキュラム、広（領）域カリキュラム、コア・カリキュラム、経験カリキュラム」[(5)] のことを指す。これらの編成原理を講義を通じて学習したのち、学生は、「１）新しい教科・活動とその他の教科との関連の編成原理」と「２）時間割全体の編成原理」を説明する。ただし、この内容に難しさを感じる学生が多いため、授業中盤に一度扱った上で、授業の終盤に復習をして理解を深める。一度目と二度目の間に、さまざまな編成原理の具体例を学ぶことで、二度目の説明を行った際に学生の理解がより深まると、経験上感じているためである。

５）新しい教科・活動を導入する際に利用する制度と、その制度が適している理由

ここでは、研究開発学校制度や教育課程特例校制度など、学習指導要領によらない教育課程の制度の説明をした上で、自分が提案し

た新しい教科・活動を実施する上では、どの制度が適しているのかを考えるワークを行う。これは、学校が教育編成の主体であるというカリキュラム・マネジメントの考え方を学ぶだけでなく、これまで学生が自身で考えてきた教科・活動が実際に制度化しうる可能性を探ることで、より教育編成の主体としての態度を育成することを目指している。

6）新しい教科・活動の到達目標・7）教育内容や教育方法・評価方法の具体例の概要

「新しい教科・活動の到達目標」と、「教育内容や教育方法･評価方法の具体例の概要」のワークは１回の授業内で同時に取り組むようにしている。これらは、新しい教科・活動が具体的にどのような目標で、単元構成で、一回の授業内容、授業形態、教材、評価方法なのかを説明することを目標とする。この回は､現行の学習指導要領の特徴である「資質･能力の三つの柱」､「主体的・対話的で深い学び」､「社会に開かれた教育課程」などを学習する回に行う。つまり、現行の学習指導要領の特徴に沿って新しい教科・活動の具体的な内容を考えることにより、現行の学習指導要領の特徴の理解を深めることを意図している。ただし、学生が最終レポートに取り組む際には、学習指導要領に必ずしも沿う必要はなく、自らが適切と判断した目標や教育実践の具体例を書くように指示を出している。

以上が、実践の詳細である。最後に、これまでの実践を振り返り､今後の課題を述べたい。

4. 振り返りと今後の課題

本稿は、筆者がこれまでに担当した教職課程科目「教育課程論」で実施してきた教育方法の工夫を整理することで、教職課程における教育実践の報告を行うことを目的とした。中でも、教職課程コアカリキュラムにおける「教育課程論」の項目の一つである「教育課程の編成の方法」に焦点を当て、実践を整理してきた。具体的な工夫点として、（1）抽象的な内容に対しては、可能な限り多くの具体例を示すこと、（2）なるべく多くの授業回で、学生自らが教育課程編成を実施する経験をすること、（3）学生の被教育経験で得られた視点を教育課程編成に取り入れること、（4）以上の３点と学習指導要領やカリキュラム・マネジメントといった本科目の他の到達目標の内容とを関連づけることを挙げたが、これらは概ね達成できているように思う。しかし、この実践を重ねるうちに、新たな困難も生じているため、それらを今後の課題としたい。

第一に、授業内での活動の時間配分がコントロールしづらいことである。授業内で取り組む上述の各課題は、学生の自由なアイデアと、教育課程編成の基本原理、そして学習指導要領を含む現行の制度の理解とを結ぶことを目指している。その中で学生の自由なアイデア出しの回と、自らのアイデアを基本原理や制度の理解と結びつける回で、受講生の学年や受講数などの状況によってクラスの到達度にバラツキが出ることがある。

第二に、これは第一の課題と関係することだが、この授業実践に時間配分が偏ることで

あり、教育課程の意義やカリキュラム・マネジメントの理解の時間を圧迫してしまうことである。本授業の到達目標のそれぞれは分離しておらず、可能な限り目標間を関連づけることを心がけているが、とくに、学習指導要領の変遷を学ぶ回の説明が短くなってしまうことがある。これは、オンデマンド形式での受講を授業外課題とすることで補っている部分もあるが、適切な配分を心がける必要がある。

最後に、本授業実践におけるワークは一人一人が違う内容に取り組んでいるため、進度にバラツキが出やすく、到達度に差が出てしまうことである。これは授業後にワークシートを回収し、次回の授業時にそれらの論点やポイントを整理したものを教員から提示することで、補っている。ただし、受講生の人数が多くなると、個別対応がしづらくなる経験をしているため、受講生の数によらない授業設計が求められる。

以上、本稿では課題「新しい教科・活動を含む時間割の作成とその説明」を題材にして、教職課程科目「教育課程論」における授業実践の整理と振り返りを行った。本稿で抽出された課題を踏まえ、今後も教職課程における授業実践の向上に努めたい。

【注】

（1）教職課程コアカリキュラムの在り方に関する検討会（2017）「教職課程コアカリキュラム」p.16。

（2）田中耕治編（2018）『よくわかる教育課程』（第2版）ミネルヴァ書房、田中耕治、水原克敏、三石初雄、西岡加名恵（2018）『新しい時代の教育課程』（第4版）有斐閣。

（3）安彦忠彦（2006）『改訂版　教育課程編制論：学校は何を学ぶところか』放送大学教育振興会、p.69。

（4）安彦忠彦（2019）「カリキュラムとは何か」日本カリキュラム学会（2019）『現代カリキュラム研究の動向と展望』教育出版、p.7。

（5）根津朋美（2021）「教科カリキュラム」田中統治・根津朋美『カリキュラムの理論と実践』放送大学教育振興会、p.133。